



小栗外傳三編

參

204
15



新
204
15

寒燈 小栗外傳卷之十三

北邨芳

東都

絳山戲編

第廿三編

宿を破寺小投して山冠を殺せ
途を草應丹索く兩婦を見り

新
204
15

斯く小栗が郎等九人の們ハ日あつて熊野山に到り小栗夫婦を見奉
る夫婦の喜ぶ斜るをも遙る道は速く身を愛する九人の們を
主君の恩務全くと愈も昔にかりぬ景平夫婦恙なれ人泣くもは以て
未だ討つ人々對ひても我此地方に居る誰か教へて来る事
同池の庄司とみ生くや。我く常阿上忍ひ敵の光景を窺ふところ
這般くは事ありと常阿上人還會し。結城持朝の櫻吹討。有
有るを細中へゆき小栗夫婦今や上人の道徳を

今市堂九人まで集ふるに能く討つこと舒まへきまあらずと多し評議とすまあ
 父小栗満平の一回鎌倉殿の勅まきとあがりりぬなり。且能く討つにりぬ一式
 詮秀も鎌倉殿の寵厚なれば彼を討んと私に做さじ。いふもして未だ將軍
 の免許を蒙り爾して詮秀討つ。鎌倉どのの申すむくなど世の人にも
 を念より免まれ角を乞ふ便宜を求め。將軍家の免状を乞ふこと。これより主従
 京都に生を便宜を求め。未だ將軍の御代か。せしむるも貴府か。あ
 爾るべき便も。いづれを空しく月日を送り。茲に美登小を那の國
 濃州小照天姫と守護し居るは。処小万長が許より足代討んと襲来す。を
 伯父とともにあは。防戦す。うち姫と伯父の去向を失ひ。此に彼を捜索れ
 ども。さらし知れず。この万長を擄む。あつて昔墓より。破く。窺ふ。あ
 万長が許も居らざ。さて殿の足跡を慕ひ。東國へや下り。あつらひ
 爾らこれより東國へ赴くと。鎌倉まで。り。其道さか。公をば。い
 姫君の正。父は。け。と。更。知。は。は。斯。く。常。陸。也。我。と。ふ。と。鎌。倉。を
 き。く。往。む。と。行。く。下。総。國。那。須。世。が。赤。小。者。あ。り。此。府。は。足。九。月。未。の。天。を。い
 日のあ。つ。短。く。て。那。須。世。の。原。に。半。を。い。ま。や。西。母。も。あ。ち。の。宿。棲
 り。とし。は。村。鳥。幽。林。に。て。飛。声。の。い。も。憐。ふ。の。悲。しく。な。く。あ。は。け。く。も
 主君の。こ。思。ひ。あ。れ。さ。う。も。旅。の。衣。れ。袖。露。し。あ。じ。い。み。居。る。う。ち。も
 日。と。や。既。母。さ。果。た。れ。そ。も。く。此。野。あ。昔。近。衛。院。の。宮。女。玉。藻。と。さ。る。が
 化。へ。野。千。と。な。り。此。野。か。く。道。さ。り。を。三。浦。上。総。の。友。介。小。勅。渡。の。り。て。特
 る。あ。お。神。通。自。在。を。好。む。り。た。れ。老。狐。な。れ。ども。王。君。の。勅。命。終。り。腹。れ。は。も
 彼。友。介。が。矢。先。か。く。此。郊。原。の。露。と。消。し。う。と。尚。々。靈。の。石。か。止。り。妖。出。る
 かせ。い。ま。公。羽。利。尚。の。道。徳。ま。く。悪。無。並。終。ふ。ま。り。し。う。と。今。も。この。陰。映。の。り。

時くくろくくわくの怪異あり。今夜の月多くて四方のあやも并に目ぶ
るるのの道かたの叢の裡の狐火と耳も響るののと声も拍手の虫け
音く友を呼たり狼の声さ入るは夜嵐の牙にききこもあそりた尋者の
りめなりせば。氣も消ゆる失るまに公剛つる丈夫の忠義の此旅なれど。
斯の妻きつてさもせき足まうして歩む。暗夜は途をさ失くあゝわ方
かを迷ひなれ行む。野を歩む。果は終る。看く道の森の初より。
一道の火の光閃出する。宣は処のある。その火の光はあゝ人なれん。し
ぞ彼もまた。行むも用も候へき。火の光を目前と。茂る草の踏
つまふ足もはして行む。火の光のあゝ也。此正もあゝ。
是を窺ふ。あり。寺の。影牆破れ荒れ。人の住と。此もあゝ。
厨ともも。火の。何人の住と。公裡不審と。

斯でもあゝ。紙を。案内を。戸を。叩く。
唯と回響して出する。戸を叩く者あり。彼人紙燭を。その火の光。小
すじ。法師の。栗の。法師。小を。此古寺の山賊の巢穴
甚猛悪げなれ。大白星のゆき圓の眼を。小を。此古寺の山賊の巢穴
と。小を。法師が。此古寺の山賊の巢穴
なり。今さら。今さら。彼
何の。今さら。今さら。彼
言語を。今さら。今さら。彼
と。今さら。今さら。彼
里の方へ。今さら。今さら。彼
は。今さら。今さら。彼

俵の最上より物を案ぶる形あり。今の言滞を以て打詰以て回意られ。
 足身おどられた辺鄙の難々荒果なる古寺なれば夜合のさくら。はわらへて
 飯をば。それら厭ひもろる。這裡に入りて宿りたまふと前もさく清行を。
 小き寺なるまゝ。傍の殿おほひく裡に入らば厨の方おほひを洗し。
 地壇のまじり居て煙茶の食を。さて云々。前も中もめく。かゝる破さの
 ことふもさ。一飯の貯も好し。今日どのうた某少く病ま。村落を出て
 銚子へひらうと。客入りのほくもさ。銭を牛へて。貞道市へ行て。酒飯を
 取ら。小太郎宜く。いそいそ。飢より爾のれ。房を煩ひ。さへて。いと
 畏しと。躊躇を法師ゆる。昔か。んと。銭をさへ。入。返。せ。市。小。行。く。とも。
 酒飯を。酒と。借。促。し。う。ら。は。房。を。煩。ひ。中。さ。入。と。腰。裡。より。銭。を。出。し。
 ちのね。傍。の。銭。を。數。へ。て。これ。を。我。許。の。酒。飯。を。取。下。と。厨。の。棚。より。欠。映。
 へ。陶。子。を。知。り。客。人。形。付。行。き。入。り。買。取。選。ら。ん。と。表。方。さ。し。く。走。せ。世。

又。立。房。の。て。い。の。中。う。と。か。は。幽。陰。の。古。寺。な。れ。ば。目。別。ね。て。安。た。ま。う。れ。
 り。も。傍。ら。め。と。ふ。く。怪。し。み。多。く。卷。角。此。下。の。三。層。で。外。へ。出。り。ひ。そ。こ。念。頭。
 ぬ。ま。へ。ち。ま。て。再。び。お。ね。小。太。郎。傍。の。言。語。を。以。て。と。め。り。た。う。う。ら。ぬ。も。め。と。
 思。ひ。一。果。て。盗。人。と。あ。り。を。疑。ふ。彼。酒。飯。を。買。取。ら。ん。と。へ。偽。り。て。同。敷。を。
 呼。ぶ。あ。ら。う。べ。一。鳥。合。の。盜。賊。め。ら。ど。の。事。く。せん。憐。々。ふ。と。さ。れ。と。此。を。
 一。本。車。を。懐。中。に。み。り。り。謾。り。る。失。の。悔。と。も。か。く。じ。彼。が。還。ら。ざ。る。
 前。車。此。に。走。走。入。爾。あ。れ。い。と。餓。る。も。あ。ら。う。食。入。り。の。を。さ。く。子。燭。火。
 か。け。厨。の。裡。を。隈。々。と。捜。索。せ。れ。と。露。む。り。の。物。も。な。し。あ。ま。り。ゆ。き。等。う。後。
 客。殿。へ。行。く。入。ら。ふ。本。車。の。阿。弥。陀。仏。も。も。足。欠。換。し。幡。天。蓋。も。切。れ。破。れ。
 蜘蛛。網。濃。り。香。爐。の。荒。足。の。痕。の。ま。り。香。の。し。つ。焚。く。さ。も。う。へ。と。雨。漏。お。



美作小太郎

那須の古寺小
 小太郎
 山賊を殺す

夢をかく人との府因れて草生さる。此光景を見て思ふ事。阿弥陀を思ふに佛
 あれと此幸多の流陀の如きいと佛様。佛も人も幸不尊とありらる。此
 本も我方のうふ似らるや。と獨まき四方を顧みざるから幸尊乃
 後者のうふ新の声々へ多れば。いふと不審也。堂の後廻り出る。此
 此の位牌堂とおしく本堂より續けらる小き堂あり。堂裡を定規する。六
 六道能化の地裁る湯杖を枕おして寐る。そのり閻羅王三途川の
 脱衣焼牛乳馬匹の們とくくする。宝冠を枕おし。或は眩枕をさし。此
 虎の伎此禪を出し。西さぬ東さぬ小外は酒肴散乱。中ふ高き
 新して眠居る。小太郎これを熟着今此るかして此化物を青書生の
 んる。物千歳を経ると。必と妖を做とや。いふ。こまに手経
 古旅人の旅人を戚し物えんと。形疾かか。今夜も吉利市あり。

小や。酒内は飽く熟睡せり。我今餓ら。此酒肴を食ひ。さしけ化物等
 醒し後膳をはかじ。笑んと配盤の前はけをためて。飲おふ。合はる。酒
 幾許の酒肴を露も。飲食し。六七多の酒肴を帯ひ。心裡類々。樂しく
 此のどもと。扇まんのを。四方を。古き銅鑼を火桶とし。側
 あり。こまを。匣の。と。炭灰も。捨て力。かま。して。撃。地
 扇を。と。し。みる。目と醒し。起。足。仁王の。大
 大。枕。上。立。鐘の。声。揚念仏を唱へ。銅鑼を拍子。に。居
 居。地。怒。を。住。行。此。狼。着。の。事。と。我
 我。我。油。を。と。下。知。の。鬼
 の。各。手。得。物を。提。小。太郎。を。中。小。打。心
 此地獄の酒肴を多くありぬと。ゆゑ陽府から此下へ。と。

さぬその酒肴も飲まらうつゆの奥もなぐせめてのてふ汝も睡をさす
 藝伎くはしてなりとも尉さん。さてこそ銅濤を打らうと此拍子に打連く
 躍をわたり又さし杯と飽まで欺きやへる地氣のこれをさすも腹上居
 う孫錫杖を小眼に提げ躍出射奉の悪亡老陽府ありてもさつらん地氣
 の面も三回まで磨られ履をまといふ諺あるを忘しや。汝はじめても
 酒肴をみんぐ飽まで食ひそれより銅濤を打つと我々が杯のりを弾はし
 今又あゝを欺ひく流く嘲罵さしはるこそ是此の罪を作且ば慈悲を
 主とする我らうらそのはくふの免これ。汝をして修羅道に落さんとする
 小ぞん悟世よ。の窟王も獄卒も彼を脱しあひと湯杖を振らうと
 かくれば窟魔も鬼も一般に鉄指さんどより揚て小を拜目がけ走寄より
 小きうこと狐物ともせど我予う狐背ひく劔奔の躍さう我も相まに
 たりおんふよく躍さよと云はくも腰の佩刀抜放ら地氣が打む湯杖は
 只一刀に切落し其手踏む大袈裟もらうとさんを斬らうとらうと
 又さう窟魔も鬼も脱衣坊もかたしと逃走もく脱はしと或は梨子
 割車切又撲切よとほもあり一盞茶付に残る斬殺はくまのう妻の方
 を望みんふ松明ありとそ大勢の這行をさしとさるさるわれどもさう
 前にも出行し土の僧れ同族を信し還り来るうん是をも殺し此寺の
 盗賊の根を断るやと牙磨ひくとまじりう又想ひ入とさう。行志は我
 かの容易なうさは太るあり。形まらふよかたしひさるさ失のめらうん
 うさの牙をりて忠義をせん今殺しは者さもの酒狂の上れ戯こさう
 時運ふかるひ牙を傷福ぬ。ちれ幸ひといひらる。脱は去らう。如まじと
 慌忙く行李を背負ひ裏の方より脱れ出さうはらしてとさう。向くと既に

七八下及びび。五人のりと殺し。そのまゝ走りてなれば。息もきれずも
勞と。ある木の根。腰を掛。志し。休憩てのり。され。素より。不知。奥。赤。内
の。地方と。云。雅。不。暗。夜の。る。中。ゆ。れ。此。西。を。何。方。と。并。く。其。裡。急。や
角。か。り。か。処。ふ。お。の。れ。均。一。さ。く。人。さ。る。や。今。事。道。を。體。なく。た。一。人。一。
ま。る。の。め。り。間。近。く。な。れ。彼。の。の。聲。ひ。は。光。景。も。て。ま。止。り。ま。じ。
ん。其。中。居。る。何。人。ぞ。同。く。正。古。寺。の。惡。僧。の。声。は。似。し。し。さ。
這。方。も。疑。る。ま。星。を。は。ま。じ。し。ん。ま。不。傍。さ。る。ゆ。也。こ。の。空。を。疑。す。ま。違
の。よ。と。我。へ。別。ち。甲。夜。の。中。と。波。寺。小。宿。り。し。旅。人。さ。る。れ。と。云。は。れ。も。
躍。り。か。り。て。抜。打。の。声。を。知。え。母。さ。り。と。斬。れ。や。啊。と。し。た。く。仰。さ。る。よ。
伏。々。と。見。え。し。しが。水。音。と。貌。す。こ。の。妖。怪。よ。と。め。じ。う。と。其。と。疑。を
捜。り。ま。じ。し。ん。ま。古。井。と。お。ぼ。く。圓。く。深。き。穴。あり。ま。て。此。古。井。の。行。入
落。た。れ。よ。と。ぐ。ぐ。と。ま。公。安。た。り。し。甚。だ。な。れ。と。う。り。と。それ。より。途。を。捜。索
行。ひ。下。り。な。り。な。り。一。軒。の。白。屋。の。前。に。出。り。此。家。は。ま。ま。妻。体。人。と。思。ひ。し。と。
こ。も。又。賊。の。住。家。さ。る。と。疑。心。を。察。し。蜜。母。垣。を。越。て。窺。ひ。の。み。女。郎。は。二。人
の。女。性。人。さ。ら。に。緝。麻。と。屋。是。り。一。人。と。年。以。三。十。を。や。こ。ね。と。え。く。又。一。人。を
三。五。と。う。り。の。小。女。ひ。が。ま。も。醜。く。な。る。容。貌。ゆ。て。母。子。と。え。れ。ば。其。の。面。似。ま。と
何。さ。ぬ。中。の。め。ど。ま。き。家。さ。る。と。外。に。男子。も。見。え。さ。れ。た。と。人。賊。の。家。か。と。せ。よ。
お。お。と。き。こ。も。め。ど。ま。此。西。を。湯。さ。り。と。も。清。く。湯。を。も。休。め。んと。戸。を。ら。と。く
と。叩。ひ。て。奥。庭。内。を。見。え。六。三。十。と。う。り。の。女。唯。と。回。應。て。出。ま。り。戸。を。開。く。と。声。が。掛
今。此。西。も。ま。る。か。何。人。ぞ。と。云。よ。小。ま。ら。某。さ。る。旅。の。者。に。お。せ。ら。る。は。く。こ。の
ゆ。り。道。を。急。ぐ。ま。り。小。宿。久。き。期。を。こ。へ。人。家。も。な。ら。世。を。た。ど。り。く。あ。の
処。へ。吟。呻。身。は。る。く。此。世。家。を。こ。ら。う。け。え。な。る。暗。夜。の。燈。火。手。中。の。炭。此。心。を

...

入て入勞きも出二足と歩むも懐ゆるふ。顔すわして休憩も。さてこそ
 髪をおどろしはれ。一夜の宿をねまわらさる。むなくも畏らるる足さか
 けはあつさまじ。背射るる体はし。まひうんや。と侮れなく。影さへ入る。体
 女の裡よりさ。歌き。小を布がさる。風寒ひえ。かて戸を推開れ。は物語を
 ゆるふ。いと傷やくらむ。ま。這裡よ入し。ま。いと。ば。小を布。び。入
 壚邊。腰くらかたれ。女を茶を汲これ。飲。秋の夜風のきく。わ。火は
 あり。し。中さんと。柴折る。焚はる。火影。ま。し。小を布。月か。火
 す。し。ら。る。袖や裾。朱の血。ち。流。て。め。し。ば。咳。然。と。く。驚。る。ま。ら。
 俄。ま。ま。物。泣。小。女。を。招。き。さ。く。中。と。小。を。布。を。穿。り。こ。れ。の。ま。ま。我。衣。の。血。や
 を。見。ぬ。何。する。人。と。怪。て。戒。嚴。さ。る。も。あ。ん。ど。ん。と。斯。な。れ。う。人。か。ら。ん。
 彼。亦。う。身。も。あ。や。う。れ。六。回。明。け。て。入。ん。の。と。女。は。ら。う。ら。對。ひ。ぬ。と。我。衣。の
 我。衣。の。血。は。流。し。不。審。て。驚。ま。さ。ふ。と。お。ほ。ゆ。と。さ。ま。あ。の。少。く。縁。故
 あり。その。跡。を。詔。り。は。ん。我。ま。こ。こ。と。さ。る。二。人。と。此。故。を。家。々。居。る。ま。ふ
 こと。さ。う。怪。し。ま。ぬ。は。ま。ま。詔。り。多。人。に。為。悪。う。な。ま。は。し。と。い。ふ。女。と。知。得
 足。合。い。急。角。の。回。應。ら。り。し。が。勢。射。あ。り。て。年。増。女。小。女。ら。ち。對。ひ。ぬ。ん。ら
 ぬ。と。お。ほ。ゆ。と。中。ら。ん。此。旅。人。と。今。も。の。中。連。入。と。い。ひ。得。ぬ。又。人。を。傷。害。し。人。と
 入。て。衣。類。血。を。流。ら。せ。ん。志。守。の。や。ど。き。ら。れ。ま。し。と。恐。怖。く。ら。り。へ。と。も。
 其。骨。柄。を。窺。つ。た。尋。常。ら。ぬ。豪。傑。と。も。思。は。れ。ぬ。や。我。上。の。憂。難。辭。を
 云。は。へ。ら。顧。り。の。心。行。ら。ぬ。鯨。よ。る。磯。虎。作。中。詔。り。ゆ。と。も。彼。等。の。ま。ふ
 呵。責。され。恥。づ。ぬ。受。ん。よ。り。遙。き。場。と。お。ほ。ゆ。ぬ。れ。ぬ。牙。の。所。由。を。詔。り。ぬ。
 いら。ぬ。の。や。と。云。は。ぬ。ぬ。小。女。の。喜。ぶ。色。入。て。命。ま。ま。と。再。爾。ひ。と。く。物。語
 あり。し。と。い。ふ。女。の。小。き。ら。ら。ち。對。ひ。し。云。出。る。ぬ。我。が。牙。の。う。人。を。包。ま。ま。



郊原
 久野
 殺
 同 草 途
 小

小栗

中いほふ。艱苦を故ひ多りれよ。奴等も小女も。素の都近きもの。さうさうさう。
 去りし此地方をさうさう。山賊の爲に。奔れ。此所は。擄まの。身となり。
 多くの賊は。姪戯。さう。幾許の。苦さ。惜し。身。斯なり。盗く。恥。あ。受。
 此の生存命。居る。き。あ。あ。種。も。難。面。の。心。今。死。こ。易。
 されど。故郷の。祝。今。一回。遠く。苦。艱。を。告。へ。危。も。角。も。做。を。ま。あ。と。
 一日。こ。と。ぬ。其。際。を。伺。ひ。脱。と。出。ん。と。公。配。と。賊。も。ま。足。を。惜。し。
 其。守。厳。め。て。去。る。に。万。夫。ふ。尚。の。勇。者。あ。り。て。誘。引。出。ま。し。逃。ま。か。し。
 足。下。の。ま。を。窺。う。人。を。害。す。多。ぶ。も。教。え。か。ら。ぬ。光。景。の。世。比。ひ。か。た。
 勇。者。と。も。あ。れ。我。二。人。身。を。救。う。せ。ま。と。笑。へ。れ。小。左。衛。首。尾。ら。笑。て。
 笑。へ。る。ふ。ふ。あ。れ。な。悲。し。わ。ん。ざ。ら。ん。ま。れ。斯。離。を。心。只。
 二人。と。居。る。な。脱。と。出。ん。と。難。く。ま。ま。き。ふ。な。と。速。に。走。り。ま。ら。ぬ。女。ら。
 笑。て。云。愚。う。の。と。宜。め。り。の。形。暗。夜。あ。れ。此。所。の。四。方。ハ。入。ら。ま。し。ま。
 山。名。も。あ。ら。鳥。川。と。印。幡。沼。と。小。狭。ま。れ。て。只。西。方。の。を。陸。に。潰。々。り。そ。こ。ま。
 古。寺。あ。り。て。賊。多。く。會。へ。其。寺。を。過。ら。れ。化。し。出。ま。し。こ。り。て。賊。の。渡。
 あり。と。中。せ。り。小。左。衛。云。我。を。喜。其。寺。に。宿。り。這。般。こ。の。と。あり。其。の。ち。
 途。中。て。又。如。此。の。事。あり。と。古。寺。ま。く。の。途。中。中。に。一。つ。傍。を。殺。せ。る。や。
 細。中。に。語。り。ま。ら。二。人。の。女。を。愕。め。と。驚。ま。ま。と。あ。ら。り。こ。小。左。衛。不。守。ぬ。こ。ま。
 悪。傍。を。殺。せ。し。は。ま。り。結。ぶ。く。頭。さ。は。傍。は。由。緒。の。人。の。や。又。一。賊。の。同。類。り。
 此。二。の。内。の。一。が。我。の。則。ち。敵。の。女。も。も。其。解。を。報。ん。と。あり。公。あ。ら。り。
 ま。上。り。て。勝。負。せ。よ。運。を。天。任。ま。し。し。や。く。と。急。ぎ。ま。女。頭。大。右。衛。
 ら。ち。あり。否。く。肅。る。の。ろ。ろ。今。も。せ。へ。ま。こ。く。賊。も。仇。こ。あ。れ。い。う。く。
 彼。亦。た。め。死。ん。や。奴。家。二。人。驚。ま。し。古。寺。の。傍。を。容。易。討。ま。と。宣。へ。り。

彼等の足盗賊の大なる。同じ悪徒の群るがら。さぞか出家のこころなれば。此二ハ
 情カナズ。故サ。あての非道もあまぬ。今日まで存命居つれと。彼亡のらさ
 い。うら。ん。夏目。遭も知れが。扱こそ。警る。れ。之。り。し。爾。あ。れ。借。成。は。一
 ろ。あ。と。部。下。の。賊。の。知。る。ま。い。ど。れ。が。明。且。ま。て。誰。と。も。此。下。の。あ。ま。あ。と
 あ。じ。を。静。ふ。休。想。あ。ひ。明日。あ。至。る。ら。い。う。も。も。し。七。奴。家。二。人。が。借。ひ。く。
 此。地。方。と。お。は。し。ま。人。と。い。う。ら。ち。一。人。の。女。厨。の。方。より。酒。肴。を。持。出。足。の。毎。扱
 賊。の。ま。つ。て。飲。食。入。る。料。は。借。ひ。と。い。物。結。あ。て。る。事。と。い。は。し。是。と。飲。食。で
 勞。れ。を。慰。め。る。人。や。と。い。う。事。小。を。う。ら。ち。ま。は。ひ。お。と。ら。う。と。我。ら。も。好。む。り。
 明日。ハ。必。ま。は。ひ。く。此。地。方。と。去。ね。し。你。く。お。る。案。も。多。ひ。そ。さ。い。ら。し。と。ま。出
 ぬ。此。酒。肴。ハ。あ。と。と。る。が。明日。此。地。方。と。旅。登。の。壽。く。酒。宴。に。用。ひ。ぬ。お。入。る。の
 今夜。の。主。なり。一。杯。飲。む。我。ま。ま。せ。い。ざ。や。と。鈍。子。を。手。に。と。ね。ら。三。十。斗。り。の
 女子。の。雨。の。八。命。に。解。せ。んと。盃。を。り。揚。ぐ。既。お。吞。ん。と。と。折。つ。ら。外。方
 暴。れ。も。南。し。く。多。人。の。身。を。光。景。を。り。女。の。さ。さ。り。小。太。郎。も。借。ひ。再。也。は。ち
 あ。は。は。を。付。小。女。の。戸。の。隙。より。外。方。を。窺。ひ。て。立。戻。り。つ。ま。へ。り。終。つ。と。今
 こ。う。お。す。る。の。の。傍。の。部。下。の。め。い。と。も。あ。て。め。を。う。荷。ひ。ま。す。る。先。客。人。を
 奥。に。入。り。背。付。忍。び。多。ひ。孫。と。一。室。の。裡。に。お。入。る。り。

第廿四編

壮夫郊原小草賊を討
 孝婦白屋小我男が舎

且。説。小。を。希。の。女。を。が。い。お。は。し。一。室。裡。に。忍。び。居。て。紙。門。の。隙。より。さ
 覗。き。その。光。景。を。窺。ふ。二。人。の。女。外。方。の。戸。を。押。開。け。の。多。人。が。一。大。き。き。と
 出。身。を。り。あ。さ。方。と。や。と。云。あ。ひ。ら。何。中。り。荷。ひ。家。裡。お。入。り。我。獲。を。持。返
 希。を。出。し。孫。と。い。く。お。喚。め。き。つ。と。る。何。さ。ら。ん。と。熟。く。を。れ。不。被。古。ま。の

傍の血まみれで息も絶えおろりて居るを女どろろこのいり母何人かかく
 做しぬと人々も同くかき荷ひま一人のうち手長なれ漢子いふ今夜
 旅人の寺より宿りて宿りてとらふ和尚をさぬとるふいと猛じれた丈夫なれ
 よき節りのいりもり人とも小勢めての故對かじと旅人をあきまき寺に
 和尚自ら我れを喰ひ集りて還るはるふ旅人かへんを隈を捜索ふ
 豫て妖物も打打ける地蔵の六箇魔の大夫牛馬の丑馬の字た二途の
 端まで殺されしとてさては旅人の所なるめいも猛き人ありとも安内
 志らぬりのあれはるるでまきし逃すまきし追付く仇討せん我も西乃
 方を尋ねて此方へけ家と隈ならねがくも足止めん心定あれは身あを
 こし失入るりやと和尚自ら尋ねり我れ西の方十町もりも追欠ら
 遂は人影もえざるゆゑ此方のもれまはるしく走居りある途め古井の

裡申く声この仇者と松明を照しは取れえり母彷彿と和尚の貌見え
 たり辛く刺上るふ斯重傷を負ひぬ何人の心なるなりと問と答と
 啼虫の声音もやそれ息はひまきと仲間の大おをむきと殺さもまのぢく
 さみせめておみ多末期のまきさからんと荷ひまね此重傷なり叶ふ
 まは社介保をかりし人和尚を斬しそく人精なる処今ひり旅人の所
 おぼえたりさる旅人の此家へまじりてはあやと問も女を涙を流し前
 此は旅人のまじりもあやりのゆゑ欺きをさるははし熟てゐるお袖袂
 血はみみ深くあり故に曲者と思ふら尚騙りてまくとをばく刃の
 うを回す鈍く寺のこと和尚を斬しゆま人も詳は終りやとやとあや
 雙言又報ひんと想へ彼尋ねるの大夫かかぬ勇者ぞと精しんまの縁で
 より頂備すも麻木酒香とこれを殺さんと既母酒宴をせんまの縁で



小太郎

火を冬郎
 放る
 虎穴と脱る

おんから此女を討つ。此女は宜処へ入り酒を勧む。酒を勧むるは。此女は
 の力なり。仇を討んと欲する。風情を以て彼女の二室を忍びて
 足下を奪つても此年比株葉よ大層よと呼ぶ。此女の故に奴亦二人助太刀
 をして彼を討しめし。此女は二室均くは。此女は盗賊亦。一殺小
 美江。女を案内。此女の討入る。光景。小太郎これを知ひて
 さればこそ室初より。女を討つ。不意と二人もあつた。酒は
 みどり。女を奪つる。斯る。我猜。女を差りぬ。天の助。高運の
 かく高運のめ。邪悪の賊と戦ふ。不知案内の此女。遇失。土は
 土は。且。不知案内の此女。遇失。か。此女を。去て
 罵る。忠義。急。此女。去て

みみ川流れ又大泥。水深く。小太郎。今。盗賊。息。我忠義。全。此女。去。皇天。我。此地方。去。尚此上の恥辱。盗賊。戦。彼。殺。此女。去。又賊方。旅。人。の仇。報。既。一。打。入。今。光景。知。去。西。方。走。我。此。在。知。東。方。へ。彼。方。と。川。と。大。泥。と。出。奇。が。限。り。な。れ。翼。が。入。り。逃。は。追。結。を。討。む。と。手。傷。の。傷。と。女。を。殺。殿。を。慕。つ。て。走。出。す。

賊衆を殺しけし再び前の賊の家に至る。二人の女の傍に居りけり。後居
 まり。小太郎血刀次捉て立裡に入らば。女の聲を聞き終る。小太郎を大鳴
 一声して云。汝賊婦我を欺き。虎穴に入らば。殆命を失はせり。此を
 天翁の助まら。我一人の力にて賊を殺しけり。今又とて。其の
 汝をも誅せん。あは。此は我所為と。いひ。あは。是まで幾許の人を
 殺し。其の月の采花をかりける。報ひ。今日想ひ知る。汝は。此の
 汝は還る。聖人の言。活確乎。と云は。猿臂をのびて。女の襟を
 ちりと捉へ。仰ぎ。引替。刀を。既。刺人と。云。小太郎
 是を。さるものも。おそろくも。纏ひ。け。此の。年。妨。せ。と
 う。故。腔。竅。小。女。心。下。と。又。女。母。の。重。傷。一。声
 あつと。い。ゆ。あ。は。も。其。身。息。絶。て。女。と。を。ら。ち。り。し。ま

殺さる。未。練。女。も。女。と。云。最。期。の。一。言。を。い。ひ。け。り。人
 女の。達。奴。家。が。思。志。気。云。傳。へ。多。し。奴。家。が。父。の。教。を。ね。の
 め。と。あれ。と。武。士。の。禄。も。食。の。の。り。が。不。回。の。世。の。主。家。の。大。故。
 家。亡。び。女。主。の。去。向。が。失。ひ。ぬ。父。其。の。少。少。か。た。ら。ひ。う。本。あ。れ。が。
 女。主。の。在。家。と。索。ひ。く。一。言。及。述。て。卷。角。も。の。り。の。思。ひ。う。と。女。乃
 負。け。旅。費。か。り。躊。躇。あ。を。さ。る。も。思。ひ。と。父。と。結。め。此。女。を。美。徳。國
 なる。音。基。の。里。に。名。を。れ。万。長。が。許。す。身。且。て。身。價。を。父。の。旅。費。と。は。し。め。て
 故。主。の。去。向。を。捜。索。す。お。知。り。の。事。は。昔。を。後。終。る。音。同。し。此。女。の
 長。が。許。す。居。り。ま。柳。と。い。ふ。名。を。は。し。て。倡。婦。と。い。ふ。事。も。あ。る。に。万。長
 去。年。の。秋。小。萩。と。い。ふ。美。藤。女。性。を。抱。え。り。て。倡。婦。と。せ。ん。と。あ。げ。り。し。こ
 女。の。れ。此。女。固。辞。を。美。藤。が。怒。り。て。女。を。變。婦。と。い。ふ。下。に。せ。り。使。ひ。

化入目も悼なげす。たそを物の教ともせと急いそげして弁わきまへはるが。そ后縁故
 のつて心こころ殺ころす賊ぞくを奪うばわれ跡あとをたてて其その人の奴家やつが父ちちの死しをわける娘むすめぞと知して
 悔くめども何方いづちもあをきとこころや。知しりたつたれが甲斐あひもあつ。一日いちにち一日いちにちとこ
 せらち今年ことしの秋あきは首くびのころ藤沢寺ふじさわでらの上人のうじんの一人ひとりの餓鬼がき阿孫あまのこか
 ぶく。其その舟ふねの温ぬる泉水すゐの中なかに入いりて青墓あせまの里さとにたはる。それよはれたその女性おんな
 あり。それとも原はらの万よろず長ながが豊とよ婦めちりし小萩こはぎよと人の風声ふうせうかたのあふ今いまの
 今いまの主人しゅじんを欺あざむける報むかひのいともあつらへや。道みちすく今いまもあつてはらにの信しんお
 出で余あまつるをきいと鈍鈍くも懸かり入いり行ゆく。何なにかやばく懸かりおはひひりてあつて
 けり。娘むすめはたまたたかぬ。しと懸かりと思おもひきや足あし盗ぬす賊ぞくの大おほなる後のちは
 此こゝ身みを欺あざむけ此こゝ女めを連つれ妻つまとあつてのいよあつた縁ゆかりはあつと別わかれ
 妹いもうめ脊せの間ま女めの涉あるもいよの顔かほと父ちちへも雨あめとこあつたが牙はを換かへて
 宿志しゆくしを遂つひさしけむせんと言いふ。言語げんごか刀やいばよりあつて月日つきひを送おくりし。母ははは
 改かへるがは孫まごをはれ。こも只ただ今いま足あし下くだるも死しぬる命いのちの惜おぼしきと我われ父ちち親おや乃な
 志こころざし氣き雖なほも故こゝろ主しゅを告つげまん柳やなぎ故主こゝろしゅといはるると云いふ。小こを弁わきまし
 授たまへ腕うでを放はなちちり。どうと座ざして言語げんごを正ただし。その名な武常陸むつむつか等ら光ひかりと
 あつた。さやとらわれて女めの愕おどろ然ぜんと驚おどろれらるら小太郎こたろうを熟しゆくくうらと胸むねを
 授たまへ命いのちのぞく故主こゝろしゅといはるる光ひかりと云いふ。斯かく云いふ奴家やつも名武なぶ常陸むつむつの
 数かずもあつた。下くださぬのちとせ。道助みちすけの女見めみするといふ知しる人ひともあつた。賤しやくしは
 までばらへ。爾その宣のたまへる足下あしもとの名なも何なにとや。何なにをりて名武なぶを奴やつが故こゝろと
 といふ。知しるもあつた。いふがれ子細こさいを詰つりまらると同おなじ小こを弁わきまし。双ふた眼まなこは涙なみだに
 濡ぬめさし傍そばき水みづの付つく回まわりもせり。が。時ときあつて鼻はなうちらみ疑うたがひあつた。

道江も斯云我の小栗家の昵近の臣の其一美登小太師為久あり。
 と笑て又敬馬父の嘲も及ぶ名武の臣が水のたほふ矣宅屋をいへ
 たり。その子息もては、いふも美登小四郎が世傳ゆてあつそし汝
 が父の道みづあまる果て我知れり。と云て後云知せん。とらまらむおれたら
 姫君の御才の上ぞ氣をいし。おとく今の斬めは、お世に赴たうとあるが。
 其後のる知けりや青柳をたぢやうり。せむ去向の知れざれば、い
 ろも捜索やとて、斯くも身も瘦し。憂き人場ゆぢや。足何ゆを父の
 為その父親の身此果と知らむとと宜と云ふ。さしく、いふもひねと云ふも
 おろく涙あり。小太師さしとらちやて幾回も嘆息し。凡媚婦の恨も
 浮きまゝとて、まゝはよむ。生る実物をあつるの難少なる情さよ。我お詰ると
 せむ。いふも、さこそ嘆ん不便やと。極き丈夫も孝を感てる。涙は眼をさるとん

語らば、長れたるおづら。公が静めてよく。我君助重公。後母の鏡
 みて湯衣の才を忍びては、ゆきとらち大殿小栗。後重公一色と云。後人の
 諸言ふかけられて、鏡念屋の口も、まをうせむ。あつて、おん傷
 ずくも下総の小栗の城。小失も此よしと。今助重公。通ふや。はひひて
 より。原孝子よは、ゆきとせむ。悲嘆ふ沈む。いふ此も一色。詮未が所為
 され、速小彼。後人討きて、後重公の口を念を晴し。あつて、おほ。は。我
 們を引、俱して鏡念屋して行ふ。相替路中して不圖。照天姫。中道。あつて、
 此姫君の縁て。親殿。その許。あつて、許嫁。あつて、あつて、あつて、あつて、
 后何屋。よ。心。居。あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
 おじさま。ん。と。安秀。方。あつて、我君。も。怨。を。懐。け。あつて、幸。ひ。と。姫君。を。り。て。甜。と。は。し
 勢。附。足。を。止。り。あつて、鬼。押。と。い。ふ。荒。馬。を。食。殺。は。して。年。暮。の。遠。恨。を。い。ひ。あつて、あつて、



易多れと年若れ女を伴ひ行へて人の見えぬも公憂へぬ跡より尋ねばと
浪引ぬと青柳の鳥目人の娶婦を拒む己うまひと潔くさえるるのこそ
やく女の云とわらるながら小を忍びざるや大謀を乱れりしことと
ゆりの忠我のさめお断とり些細のこにかはるゝ大事を誤りもあらずなく
誹謗をうけ多し強て伴ひ多りれと申すも今世間の堅くは知れ
旅路の女子の申今も命の世身の人といふる人又禍に遭ふべ己父の
公稟後よく忠を言はばつと前の如くお付けりはそれとも丈夫の出
せ一言語細も言不及ぬと申すも思ふに伴ひもよそながら同じ旅路を行
多し雨さして人々の害の多ししる尚厭ひ多うと云ふ小太郎も微々女子も
似げき道にさうらふも迷はる望まらば流石おは旅路を能野まぐ
いざ旅奔まりねがふ徳全殿を憐れぬ我の身と申すは能野まぐ者扮打ん

昔柳やそらら娘と命定ぬ雨の音の賊の奪ひへ道者の衣裳もゆふ
これめんアせと長櫃の裡を撈へては出せし小太郎大まき喜びて物
教止め主従巧を全くと吉兆とこそ言ふといふととまわりの一衣裳
をえ撫はく能野路にきて支ぬ茲に説話する賊流へ横山が部下の城主
由利の新發意とて限りなく強盗し此亦小集宛と營み旅客を行叔小
術計よくかり或は地獄の糸を引又の猛獸怪異を現し人々も膽を
潰さしを失うて金銀衣服を奪ひえそのこころは容貌は麗き女の
あはれ足さも奪ひ或は妻としあはれ信ね斯思進をな行さば人の上命
を奪ふ又多く皇天の悪と云ふ小太郎が為る一時を歌をうて討れり

